

令和2年度 安曇野市農業農村振興計画推進委員会(第1回)会議概要

1	審議会名	安曇野市農業農村振興計画推進委員会(第1回)
2	日 時	令和2年7月21日 午後1時30分から午後3時10分まで
3	会 場	安曇野市役所 本庁舎 大会議室
4	出 席 者	中島完二委員長、岡村紀子副委員長、細田直稔委員、福嶋子真委員、鈴木浩哉委員、東稔丈委員、古田俊委員、久保田敏彦委員、藤原光弘委員、松本遊穂委員、古田然委員、西澤智成委員、田中浩二委員、平田米子委員、小林みずき委員、岡村公夫委員、清澤栄三委員(17人/23人中)
5	市側出席者	宮澤市長、高嶋農林部長、小林農政課長補佐兼農業政策係長、齋藤生産振興担当係長、中村集落支援担当係長、平田マーケティング担当係長、農業政策係高野副主幹、農業政策係鈴木主査、二村市農業再生協議会事務局次長、佐藤耕地林務課長、高木農業委員会事務局次長、藤原農業委員会事務局次長
6	公開・非公開の別	公開
7	傍聴人	0人 記者 1人
8	会議概要作成年月日	令和2年7月27日

協 議 事 項 等

1	会議の概要
	(1) 開会(高嶋農林部長)
	(2) 委嘱書交付
	(3) あいさつ(宮澤市長)
	(4) 委員長・副委員長の選任、あいさつ
	(5) 諮問
	(6) 協議事項
	ア 安曇野市農業農村振興計画推進委員会について
	イ 安曇野市農業・農村振興計画について
	ウ 今後の進め方について
	エ 自己紹介・意見交換
	(7) その他
	(8) 閉会(高嶋農林部長)
2	委員長・副委員長の選任
	自薦、他薦なく、事務局の腹案により委員長に中島完二氏、副委員長に岡村紀子氏を諮ったところ、出席者全員の同意を得て選任
3	協議事項
	(1) 安曇野市農業農村振興計画推進委員会について
	【主な意見等】
	なし
	(2) 安曇野市農業農村振興計画推進委員会について
	【主な意見等】
	なし

(3) 今後の進め方について

【主な意見等】

- ・9月は、繁忙期のため出席できないと思う。承知いただきたい。
刈り入れて忙しい時期だと思う。承知した。

(4) 自己紹介・意見交換

- ・日頃感じていることは、農業従事者の減少。現在、市の農業委員会では、農政課とともに、「人農地プランの実質化」に取り組んでいる。昨年2月に、安曇野市の全農家を対象として営農計画書配布時に「将来の農業に対する意向調査」を同封し、回答を依頼した。回答率が55.9%という非常に低い数字で、この結果からも農業離れが起こっていると危機感を感じた。

回答の内容としては、5年後農業従事者がいなくて農業が維持できないと回答した人の割合が全体の20%で、10年後となると、3分の1が農業を維持できないという回答だった。

この回答の意味するところは、農業社会の崩壊につながってしまうということ。そこで、農業従事者を少しでも増やしたい。定年帰農者、移住者などのような形でもいいので、農業従事者を減らさない、できれば、増やせるよう進めていけたらいいと思っている。

- ・水稲を中心に穀物や野菜を栽培している農業法人の代表をしている。農業団体としては、若手水稲生産者グループに所属し、安曇野そば生産組合にも所属している。

兼業農家が離農し、我々のような農業法人に農地集積が進んでいる現状がある。施設や農業機械の規模拡大などで対応はしてきているものの間に合わず、特に社員の確保は最優先課題。一企業として、人材確保の努力はしているが、農業政策として、農業法人への就職について、周知等行っていただき就農者を増やすことに取り組んでいただきたい。

次期計画に期待するものとしては、若手水稲生産者グループでは、品種登録前から風さやかの推奨の取り組みをしており、行政にも協力してもらい周知が進んできたが、まだまだ足りないところもあるので、次の計画に向けてもさらに進めていきたいと思うのでよろしく願いたい。

- ・りんごなどの果樹栽培をしている。夫は新規就農6年目で、自分自身は2年前に首都圏から移住してきて、栽培や販売のサポートをしている。所属としては、松本農業女子くらら、NAGANO 農業女子、全国区の農業女子プロジェクトにも参加している。農業において、女性の視点をどう生かせるかということを探りながら、工夫し実践しているところ。

日頃感じている課題としては、1つに絞ると、今年は、コロナの影響で、店頭での試食ができない、また、観光客が減っている中で、産物の魅力をどう伝えるか、どうやって食卓に届けていくかがキーワードになると感じている。これからは、オンラインの商談や YouTube の配信など、オンラインの活用が必須になると思うが、オンラインだけで終わらせてしまうのではもったいないので、オンラインとPRをつなげていくことができればいいなと思っている。

次期計画に期待することとしては、自分自身、「私たちが農業を選んだ理由」という冊子に数年前に出会い、それを見て、都内で行われているマルシェに行き NAGANO 農業女子の方に出会い、こういう暮らしや働き方がいいなと思ったのが、今に至ったきっかけだったので、紙媒体でもオンラインでもいいので、興味を持ってもらえる情報をもっと発信して行って、実際現地に来てもらって、というような仕組みを作っていけたらいいと思っている。

- ・2004年に1ターンで首都圏から生坂村に移住して、生食のぶどうを14年間栽培していたが、

ワイン用ぶどうの栽培をしたいと思っていたところで、明科の農業を守る会の活動を知り、天王原での耕作者の募集に応募し、選定されたため、現在は、天王原でのワイン用ぶどうの栽培に専念して取り組んでいる。天王原は、2017年から植栽し始めたので、早いものでもまだ4年目で、収穫はまだまだのため経営的には厳しい。経営として1年でも早く稼げるように軌道にのせることが課題。

また、圃場が山のところのため、鳥獣の被害がかなりひどい。自分1人では、限界なので、地域として、また行政と一緒に取り組んでいくべき課題と感じている。

次期計画に期待することとしては、安曇野市は米、りんごだけでなく、ぶどうもいい品質のものでできる環境にある。また、今、全国的にワイン用ぶどうはブームで、県内だと東御市や高山村などに都会から栽培できる場所を探してきている人もたくさんいると聞く。安曇野市には、まだそういった人を受けいれるキャパシティがあると思うので、ぜひそういう人の受入れも行っていったらいいと思う。

・米、露地野菜の栽培をしている。里親研修を2年行ったのち、独立して、現在新規就農2年目。機械も販路も何もないところからのスタートのため、苦労している。

就農してみて、農薬を使わずを得ない現状も学び、慣行栽培の必要性も理解はしつつも、就農前は、愛知県で12年間製造業に携わっており、消費者としての感覚がまだ強く、環境のことも考えていきたいので、有機栽培も一部経営の中に取り入れていきたいと考えている。そのため、次期計画に期待することとしては、コロナ禍で農業に対する消費者の関心も高まってきていると思うので、有機栽培も含め、安曇野産の安全な農産物のイメージを発信することで、安曇野での就農、安曇野産農産物の消費拡大につなげられるような体制づくりを計画に反映できたら嬉しい。

・外食産業向けに少し変わった野菜を年間100種類くらい栽培しているのと同時に、近隣の農家さんと栽培委託という形で契約し、栽培してもらった農産物も併せて、都内のレストラン、結婚式場、ホテル等に販売している。自分の担当は、チコリーの栽培やブランディング、プロモーション、マーケティング的なことを担っている。

日頃感じている農業課題としては、生産者が価格決定権を持っていないことが多いことが大きな問題だと思っている。国は、就農支援対策として、新規就農者に5年間年間150万円支援しているが、補助金をもらった新規就農者のうち、5年後に経営計画の目標を達成できる人は14%に満たないと聞く。就農の入り口の準備はあっても、出口の準備がないということはずっと昔から感じている。そんなことから、次期計画に期待することとしては、出口戦略に重点をおいて、農家の所得向上を目標に掲げて、最終の生産者に響くようなことを目標にできたらいいと思っている。

・中山間地域連絡協議会と集落営農組織連絡協議会の代表としてこの委員会に参加する。中山間事業には、約20年携わってきた。水田が主だが、勾配、落差がある圃場ばかりなので、土手の草刈が大変。今のところ70歳くらいの人があるので、団体の活動をなんとか継続していきっているが、5年後、10年後のことは少子高齢化で見通せない状態。

次期計画に期待することとしては、中山間地域は、行政からの補助がなければ、成り立たない。今は補助金があってプラスマイナスゼロでなんとかやっているの、補助制度が継続すること、また、人口が少なくなってきたので、機械力の発展にも期待している。

・鉢花、野菜等を生産しており、ほりがね物産センターの理事をしている。ほりがね物産センターは、村の中に2、3か所あった朝市が自然と一緒になり、今の形となり、その後、道の駅になったことで、一気に売り上げが伸びた。しかし、今は、競争が激しいので売上は頭打ち。体制としては、シルバー等も含め、スタッフ約80名で運営しているが、高齢化し、担い手ができにくい硬直した組織になってきている。組合員の中には、専業農家のご子息もいるが、忙しいとなかなか中に入ってもらえない。新しい人が素直に入れる組織づくりをしていかないと先行きがないと思っている。地産地消に先駆的に取り組み、食堂、加工、総菜も積極的に取り入れてやってきており、昨年度のレジ通過人数は、約51万人とありがたい状況ではあるが、組織の継続のためには、自分も含め、組合員の意識の変革が必要となってきている。

・信州わさび組合、信州わさび組合青年部、全国わさび生産者協議会に所属している。生産者協議会は、全国組織で、3年に1度大きな品評会がある。今年は、静岡で実施予定だが、コロナの影響で未定となっている。その3年後は、安曇野市で開催するという話もあるので、その際は、行政にも協力をお願いしたい。

日頃感じている農業課題は、いろいろあるが、中でも、わさび栽培はほとんどが手作業のため、機械化を進めていきたい。また、それと同時に、先人からの技を次世代に伝承する活動にも取り組んでいきたい。また、水耕栽培システムの確立、新品種やオリジナル品種の確立についても、取り組みたいと感じている。

・りんご農家で、安曇野農業経営者の会を代表し、この会議に参加している。安曇野農業経営者の会といっても前身が三郷のりんご農家を主体とする団体だったため、今もほとんどは三郷の果樹農家の組織。「安曇野」とあるのに、今のままでいいのかと団体の在り方についてどうすべきか悩んでいる。可能であれば、この団体とは別に、安曇野市全域の団体が別にできてもいいのかなとも感じる。

団体の活動としては、友好都市の埼玉県三郷市のお祭りでは毎年大量のりんごを売りに行っている。この活動を継続することで、三郷市では、安曇野のりんごのおいしさが広まってきていると感じる。

会員からは、事業継承の前段階として親との経営方針の違いのすり合わせが難しいという話を聞く。自分は、新規就農のため、好きなように思い切りできるが、脱サラして、両親と一緒にやっている仲間からは、両親は今まで通り、それなりに稼げれば、今のペースで無理せずやればいいのかと考えているため、口を出せず、結局稼げないので、深夜にアルバイトをしているという話も聞いたりする。家族の中で話し合いがうまくできれば、なんの問題もないのかもしれないが、家族同士だからこそ難しい部分もあると思うので、そういったときに、アドバイスなどがもらえる仕組みがあればいいのではないかと。

また、小倉地域は空家が多いが、新規就農者を呼び込む力が強いので、空家と移住者とのマッチングに力を入れてほしい。加えて、現状では、自らが経営者となる新規就農には補助があるが、農業法人で働きたいという人への支援はあまりなく、そういった人は、移住者でも「農業者」という枠で扱われることが少ないが、今後は、そういった人が増えていくだろうし、増えていくべきだと思うので、農に携わる多様な人材が暮らしやすい農村になっていくためにマインドチェンジが必要。働き方、ライフスタイル、価値観の多様化を考慮していくべきだと思う。

次期計画に期待することとしては、安曇野市が多様な働き方、ライフスタイルに対応できる農業振興地域になり、それにより、多様な生産者が生まれ、多様なニーズに対応できる安曇野市になればいいと思っている。

・市場で農家さんの持ち込んだ農産物を競売したり、県内外、遠くは四国中国地方等にも卸している。市場で昭和、平成、令和と勤めてきたが、その間、市場経由率はインターネットでの直接販売等が増えてきたことも影響し、約30%減少した。今のままではだめなので、ただ待っているだけではなく、農家さんとしっかり決めごとをしながら、エンドユーザーを決めながら、契約的なことなどもやってはきているが、コロナの影響で、業務用、給食等への販売が非常に厳しい。ただ、量販店の売り上げは、二けたの伸びがあるところもあると聞く。量販店への販売もしていかないといけないと改めて感じているところである。

直近の曇天長雨により野菜の価格が高騰している。盆商戦も高値で推移することが予想される。7月については、昨年と比較して平均単価が50円高い。農家の皆さんが作った農産物をより高い価格で売れるよう努力し、地域に貢献していきたいと思っている。

・三郷地域をメインに、主にそばを栽培し、昨年度からりんごも始めた。長野県農業法人の理事をやっている。また、中小企業の経営者の勉強会の組織の長野県中小企業家同友会の代表理事をやっている。新規就農で、会社を作って11年目。そば栽培は、土地利用型農業で土地が必要となるので、耕作放棄地を引き受けて面積拡大をしてきた。農業委員さんにご尽力いただいたり、人農地プランの担い手にも選定してもらったりしながら、地域から紹介された土地は一切断らないというスタンスでやってきた。3割くらいは、耕作放棄地を再生してきているので、市等の補助金も活用しながらやってきている。

農地を再生する中で感じているのは、農家の高齢化。始めたときと比較しても確実に進行している。世代が変わって、土地の貸借も遠くに住んでいる親族とやりとりすることも増えてきており、担い手が少ないと感じる。

農地は、再生して終わりではなく、そこがスタート。持続可能な農業にしていくためには、耕し続ける人を育てないと農村再生にはならない。そのためにも若い世代の就農が増えないとだめ。そういう環境を作らなければならないと感じている。

7年前から新卒の採用を積極的にしており、一番力を入れているのは、南農の卒業生の採用。南農では卒業生100人中1人が2人しか農業関係に就職せず、ほとんどが他産業に就職すると聞く。せっかく農業を学んだのにもったいないので、そこをなんとかしないとけないと思い、高校を卒業して、いきなり農業で起業するのはハードルが高いので、少しでも就農の受け皿になればと採用している。ただ、一企業にできることは限られるので、農業政策として、地元の農業高校生はもちろん、1ターンで就農したい人、農家の2代目、3代目など、さまざまなライフスタイルの中で農業をやりたいという人がいるので、そういった人たちが、うまく稼げて定着できる環境を作ることを盛り込むことが必要。私どもの会社では、サラリーマンでもできる農業というものを目指している。いろんな形が横のつながりを持って、安曇野の景観を守ることができる政策が一緒にできればいいと思う。みなさんのご意見を聞いて勉強していきたい。

・消費者代表として参加させていただく。みなさんの話や考えを聞いて、消費者の立場でぜひ応援したい、一緒に学んで、安曇野市の自然、環境を残しながら、いい市にしたいと改めて感じた。また、後に続く人に伝えていかなければならないと感じている。

毎年、市内の契約した農家さんから大豆を買って味噌づくりを行っている。昨年はなんとか数量を確保してもらったが、今年もお願いしたところ、今後はできてみないと言われてしまい、気候の影響等を受ける農業で生活することは本当に大変だと感じた。消費者としては、協

力、応援したいと思うし、会員にも伝えていきたいと思う。

・安曇野市には、多様な農家がたくさんいるので、この委員に声をかけてもらったときは、重責を感じたが、信州に身を置く研究機関として、このような貴重な機会に参加させていただくことをありがたく思う。大学院のときから長野県で学んでおり、直売所や6次産業化、また、若手農業者のエンパワーメントに向けて研究を進めていて、松本農業女子くららやマイスターのみなさんにもお世話になっている。

どこでも課題は継承問題と伺う。家族でも、地域でも集落営農の担い手がない。どうしたらいいかと投げかけられても、自分自身まだ、答えに行き詰まる部分はあるが、みなさんの話を聞きながら、研究を進めていくとともに、策定の部分でお手伝いできたらと思うので、勉強させていただきたい。

・少子高齢化等により、安曇野の景観に荒廃農地が増え、景観が悪くなることを危惧して公募委員に応募した。農地の集積は進んでいるが、農業で稼げないと難しい。そのため、ブランド化、地産地消などの推進が重要ではないかと考えている。銀座NAGANOでのPRやクラウドファンディングの景品に農産物を使うなど皆さんと一緒に農業振興策を考えていきたいと思っている。

・38年間教員をやってきて、今は教育委員会にいるという立場でこの委員会に参加する。義務教育の中でも農業体験をたくさんやっているが、子どもたちは、農作物に感動するのではなく、農作物を作っている耕作者に感動する。小さいときは農業に関心を持つ子は多いが、年齢を重ねるにつれて、職業として農業を選択肢とする子は少なくなるのが現実。どこに改善の余地があるかずっと考えている。

自分自身も兼業農家としてやっており、教師として現役のときも両立しようとがんばってきたが、部活など多忙で両立は困難で、50代半ばに父が病気をしたのをきっかけに人をお願いをすることにした。今は少しだけ畑をやっている。そういった現実と子供たちの姿を思い浮かべながら、どういったことができるか考えてやっていきたい。

・農村生活マイスターは、平成4年に女性版農業士として、県が認定する制度として始まった。掘金で新鮮市を始めた女性たちが先駆け。安心安全な農作物を子どもたちに届けたいということで、子供たちに給食食材を届けたり、食育というテーマで、保育園や小学校などで大豆や豆腐を作るお手伝い等をしたり、伝統食を教えたりしてきたが、会員の高齢化も進んできており、若い農業女子の加入もしてもらえよう活動の在り方を模索している。安曇野支部としては、1ターンの就農者のパートナーが地域になじめるよう交流会を行ったり、南農の女子生徒との交流会も継続している。女性として農業をどうしていくかが課題である。

・欠席委員からの意見(事務局代読)

安曇野市の農業課題

農地の流動化(JAの関わってきた農地集積円滑化事業が令和5年から完全移行するが、十分な農地のコーディネートが出来るのか?農地中間管理事業への移行手続きに関係者の理解を願いたい。)

担い手・集落営農の将来(担い手経営は法人化も進み大規模化している。集落営農組織は立ち上げから10年以上経つても世代交代が見えず、先行きに不安がある。担い手の皆さん

も精いっぱい面積を抱えている。安曇野は専ら水田地帯であり、土地利用型農業が大きな面的土地活用をしている。米、麦、大豆、そばの作型での持続性が得られる営農モデルの確立が急務であり、JAの担う販売に責務を感じている。）

多様な地域農業の可能性（生産者側は親元就農、1ターン、定年帰農と多様な担い手が育っている。一方、消費者の地元農産物に関心が高まりつつある。直売所販売は地産地消を形にした取り組みで食の交流の場になっている。土地柄、冬場の農産物が少ないので、行政から積極的な農産物加工の施設の設置で後押ししてほしい、通年の商材確保に向けても要望したい。また、多様な販売により「安曇野ブランド」を活用して米、りんご等が扱われている。このブランド化に至っては、先代より受け継がれている賜物である。JAでも共同選別等を通じて統一規格にて市場流通により、その価値が評価され、維持している。産地ブランドは地道な継続がなければ衰退となる。当然に物量、そして品質の高位継続である。しかし最近、個人出荷による「安曇野産」について粗悪なものが流通している安曇野産にキズが付いている残念な状況もある。多岐にわたる経営体が、行政の力添えにより地域の一体感を醸成できないか。そこで、かねてより要望しているが「安曇野市認証基準」を設けてほしい。）

次期計画に期待すること

- 計画実行にあたり、明らかな進捗の遅れについては、前向きな中間検討をされたい
- 農を核とした地域内流通(交流)の促進
- スマート農業への支援(普及・推進)
- 農業関連機関の横断的な協議の機会

以上